課題研究をもとにした授業実践事例報告
―博物館活用のポイントをおさえた「むかしのくらし」の授業―

伊東　大介（東村山市立青葉小学校）

１．はじめに

報告者（伊東）は、２００８（平成２０）年度に東京学芸大学教職大学院で「小学校教育における博物館を活用した指導の在り方～歴史学習・地域学習を例として～」のテーマで課題研究を行った。その課題研究の中で歴史学習・地域学習における「博物館活用のポイント」を教員向けに提案した。今回は、そのポイントをもとに、報告者が勤務する小学校で計画・実施した博物館の活用事例を報告する。

２．授業の概要

①学年　３年生
②教科　社会科・総合的な学習の時間
③単元名　むかしのくらし
④活用した博物館　江戸東京たてもの園（東京都小金井市）
（江戸東京たてもの園についての詳しい情報は　http://tatemonoen.jp/index.html
最終アクセス　2014/06/29　）

３．博学連携のポイント

報告者が、課題研究で提案した「博物館活用のポイント」は、次の４点である。
①教師が実踏でよ～く見て
②学芸員や学校担当者にいろいろ聞いて相談を
③事前学習で課題はっきり
④欲張らずにポイントを決めて見学じっくり
※下線部をつないで、「よーく見て、いろいろ聞いて相談を、課題はっきりポイントじっくり」と五七五七七の語呂合わせで覚えられるようにしてある。

簡単にそれぞれのポイントを解説する。

①「よーく見て」・・・・・見学の実踏というと、施設までのアクセス、集合場所、昼食場所、トイレなど、児童管理に直結する場所は良く確認するが、展示内容を教科の内容まで関連させて見学（実踏）することが大切である。実踏で展示内容をよく見ることは、学習内容の充実に直結する。

②「いろいろ聞いて相談を」・・・・・①に続いて、事務的なことは博物館の担当者に聞くが、展示内容について事前に質問することがどのくらいあるだろうか。教師に、見学前に博物館での学習内容の計画がなければ、質問することがない。計画をもって実踏を行い、その内容が博物館との話し合いによって修正され、より充実したものになることが理想である。キーワードは「博物館職員と教員との協働」である。

③「課題はっきり」・・・・・博物館で児童が走り回ったり鬼ごっこを始めたりする場合の多くは、博物館での学習課題がはっきりしなかったり、ワークシートが単なる穴埋めで合ったりする場合が多く見られる。いわゆる「自由見学」には学習課題がはっ

きりしない場合が多く見られる。見学の際の課題がはっきりしていて、その課題に取り組むことで、展示をより注意深く見ることができれば、「静かにしなさい！走り回らない！」と注意することは格段に減少する。

④「見学じっくり」・・・・・展示をよく見ると時間がかかる。博物館には、多くの展示品があり、見学者の多くは「入場料を払っているのだから全てを見ないと損」と考えることがあるのではないか。しかし、児童が学習の目的で博物館を見学する場合、全ての展示を見学する必要はないし、全てを見ることは、よほど小規模な博物館でないかぎり不可能である。それならば、初めから学習に関連のある展示に絞って見学するのが効果的である。むしろその方が、児童の印象に残る見学になるだろう。

４．博物館の受け入れ体制

今回、見学した江戸東京たてもの園では、小学生の団体見学向けに『昔くらし体験』を提供している（詳しくは http://tatemonoen.jp/contact/hitsudoku.pdf　最終アクセス 2014/06/29）。内容は「石臼での粉ひき」「火鉢（火おこし）」の２つである。それぞれ３０分ずつのプログラムで、セットでちょうど１時間、園内の農家で行われる。担当はボランティアスタッフの方々が中心である。

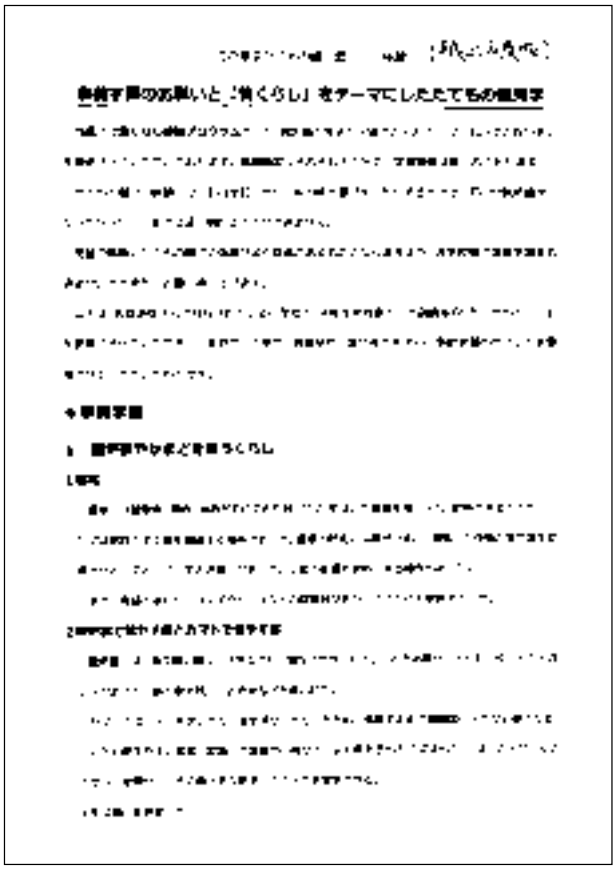
そして、ここで特筆すべきは、たてもの園は見学前に、学校に「事前学習」を求めている点である（資料１）。

「たてもの園での体験では、石臼を回したり、炭の持ち運びをしたりするだけで、石臼や囲炉裏をつかった『くらし』にまでは深く触れることができません。児童の皆様にたてもの園での体験がより意義のあるものとなりますよう、各学校様で事前学習をお済ませいただきたくお願い申し上げます」（資料１より引用）と、たてもの園でできることと、学校に依頼することをはっきり記載している。これは、先に示した博物館活用のポイント③④「課題をはっきりさせ、じっくり見学する」ために、博物館側も「事前学習が必要である」と考えていることを示している一例である。具体的にどんな事前学習を行えば効果的な体験活動ができるのかも記載されており、教師にとって「何を押さえてから博物館へ行けばよいか」が明確な内容になっている。通常博物館が学校に示す事前指導の内容は圧倒的に見学のマナーに関することが多い。今回のように、「博物館で行う体験のために、このような内容を知っていることが大切であるから、ぜひ学んできて欲しい」というきわめて具体的な事前学習内容の提示は、なかなか見られない貴重な例であり、博物館見学充実のための重要な要素である。教師にとって（我が身を振り返っても）様々な理由から「事前準備はいりません」という体験活動が魅力的に映ってしまうことも多いのが現実かも知れないが、事前学習の充実が見学の成否に深く影響することは知っておかねばならないだろう。

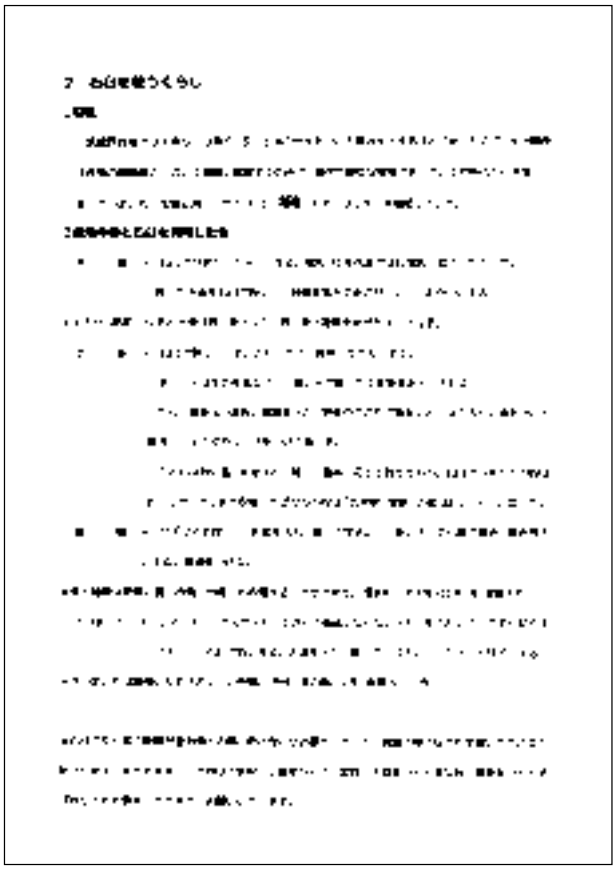
博物館が学校向けに準備している資料１のような資料によく目を通してから実踏することも当たり前と言えば当たり前だが、実際にはなかなかできていないことである。

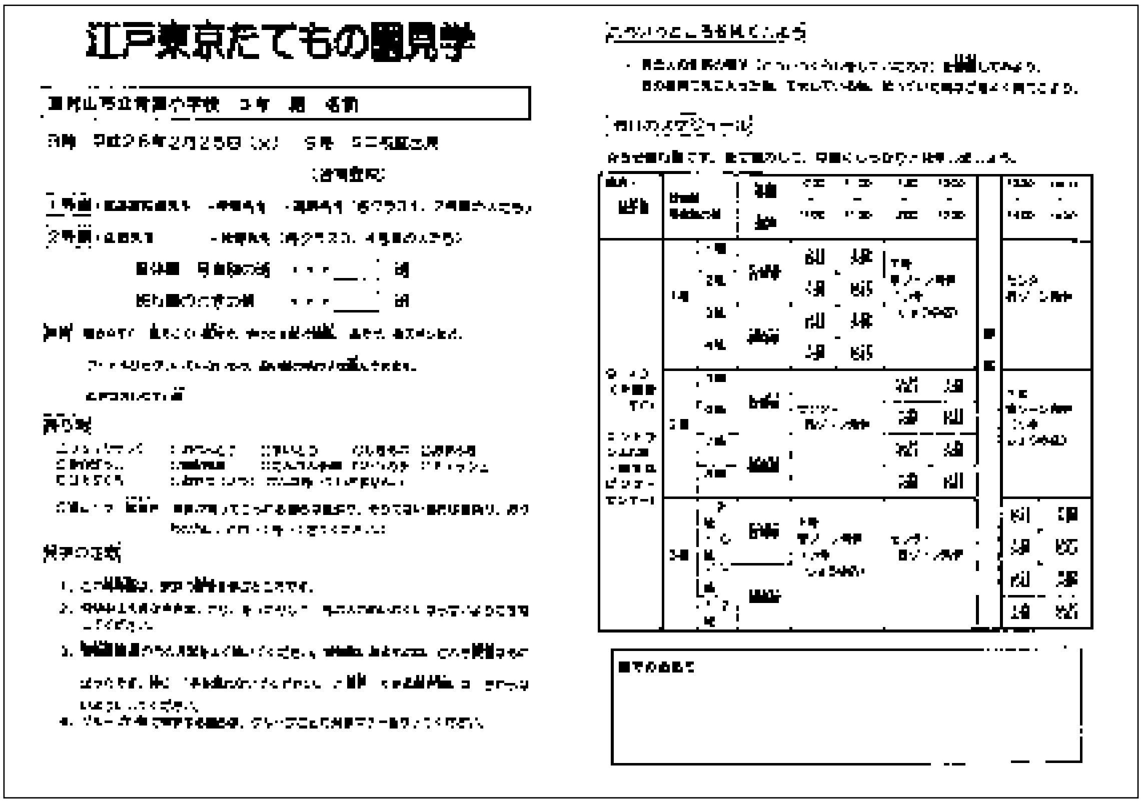
また、今回は、たてもの園が試験的に行った昔くらし体験ショートプログラム「小寺醤油店で量り売りを考える」を提供してもらった。これは、昭和３０年代後半まで広く行われていた「量り売り」の再現をたてもの園内にある「小寺醤油店」の建物の前で行うプログラムである。　このプログラムを含め、しおり（資料２）のような時程と内容で、たてもの園見学を実施することにした。

資料1-1

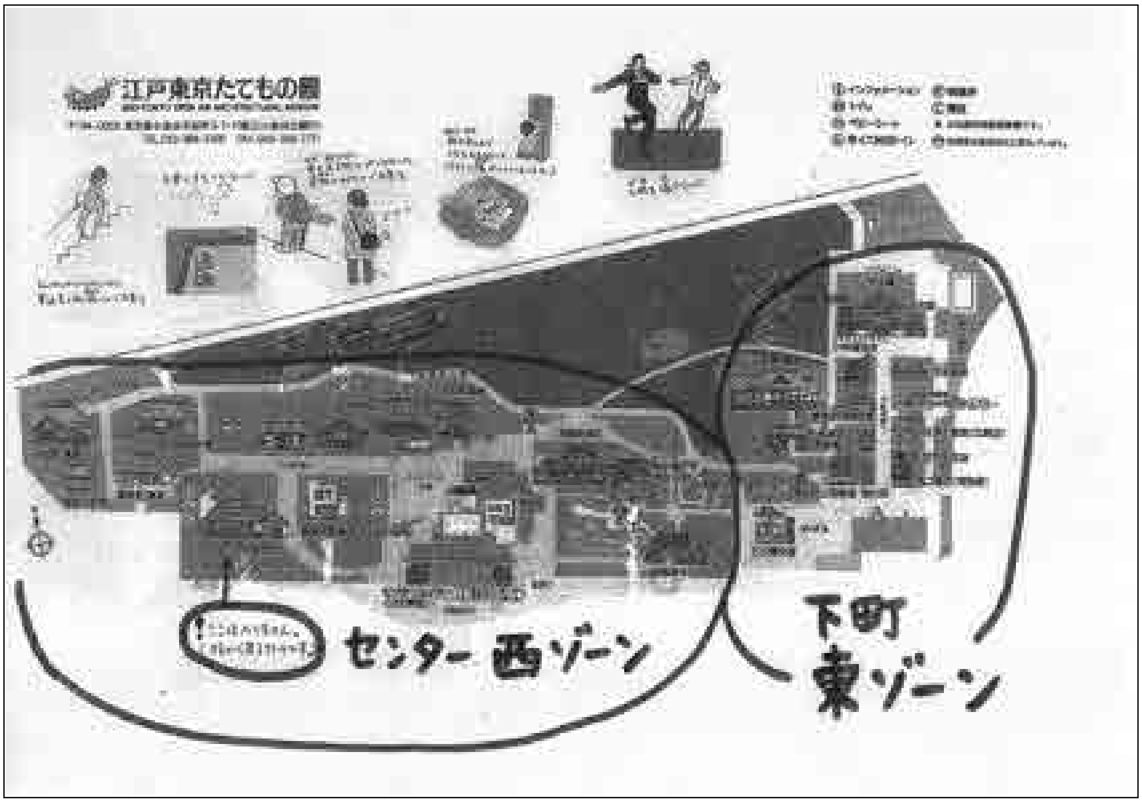


資料1-2





資料2-1



資料2-2

５．事前学習をどのように行ったか

江戸東京たてもの園見学のために行った事前学習の授業内容と時数は次の通りである。

①たてもの園が通常提供している体験活動（石臼・火鉢）の充実のために学校に求めている事前学習（資料１参照）

・「囲炉裏やかまどを使うくらし」について

・「石臼を使うくらし」について

時数：上記の２つの内容を合わせて１時間

②たてもの園の展示内容（建物）と学校での学習内容との関連を深めるために行った事前学習

・たてもの園内の地図、「WELCOME TO 江戸東京たてもの園ガイドブック　２００９．１０．３０　第９版（たてもの園発行）」の２つの資料を活用して、特に今回の学習内容と関連が深いと思われる建物について

時数：１時間

③「小寺醤油店で量り売りを考える」のための事前学習

・量り売りに使われていた、一升枡、五合枡、一合枡・一升瓶を使い、升の名称・　容量・使用法・使用目的などについて（写真１）

時数：１時間

写真１

　見学前の「枡」についての事前学習の様子。写真左側の大型液晶画面に、江戸東京たてもの園のホームページにある「小寺醤油店」の画像を呈示しながら枡・一升瓶について解説した。授業者は報告者（伊東）。

６．博物館活用当日の様子

①博物館活用（見学）期日　平成２６年２月２５日（火）天候晴れ

②参加者　３年生１～３組　児童計９２名

（青葉小学校についての詳しい情報は　http://higashimurayama.ed.jp/e10-aoba/

最終アクセス　2014/06/29）

③引率者　管理職１名

担任３名　（１組担任・教職経験年数２６年・学年主任）

（２組担任　同　１年）

（３組担任　　同　　４年）
担任外１名（算数少人数担当　同　　１６年・本報告者）

④見学の実際

資料２のように、クラスごとに、

・体験活動（石臼・火鉢）　（場所は吉野家・綱島家の２カ所に分散して）写真２・３
・下町東ゾーン見学（小寺醤油店での量り売り解説が中心）写真４・５
・センター西ゾーン見学

の３つの内容を順番に行った。これは、３クラスで、同時に同じ内容を実施した場合、一カ所に大勢の児童が集中することを避けるためである。

写真２・３　石臼・火鉢の体験で使用する道具。石臼は土間、火鉢は座敷で行われる。

ここでは、今回、たてもの園から試験的に提供していただいた「小寺醤油店での量り　売り」の内容を報告する（写真４）。

写真４

天気が良かったので、小寺醤油店前の通りで、枡・一升瓶を使って、量り売りの様子を演示・解説するたてもの園学芸員。写真の升は左から、一合、五合、一升。一升瓶から一升枡へ水を移し、一升瓶と一升枡が本当に同容積か確かめている場面。

枡から一升瓶に入れる際は、じょうご（漏斗）を使用した。また、バケツから枡に入れる際は、ひしゃく（柄杓）を使用。単に、枡と一升瓶があればよいというわけではないことを学ぶことができた。

今回の見学のキーワードである「事前学習」が大切と教員に話すと、
「初め（見学する前）から（内容を）知っていると感動がなくなり、見学の意欲が削がれるので、学習が深まらないのではないか」
という意見をよく聞く。私はこれについては、内容によると思っている。少なくても今回のような学習を目的として博物館を見学する場合は、事前学習をしないで見学に訪れるより、事前に知識としてもっていた方がよい。当時の「お使い」の話から導入された「量り売り」の再現を見たこどもたちの声は、
「枡！」
「一升枡と一升瓶。」
「学校で勉強しました。」
というものが多かった。「前に一度見ている」もの、つまり自分と関わりのあるものが登場したことで、対象物と意欲的に関わることができた児童が多かったと推測される。
　量り売りから、当時の日常生活の道具に興味をもった児童に、学芸員は「それではその頃使われた道具を売っているお店へ行ってみようか！」と促してくれ、つぎに同じエリアにある荒物屋「丸二商店」へ移動し、いろいろな日常用品を調べることになった（写真５）。

写真５
　丸二商店内で、当時の日用品について質問する児童。

　このような展開は、児童が「量り売り」から当時の日常用品に興味をもち、その学習の対象がすぐそばにあったわけで、まさに博物館ならではの学習と言える。こういう場合は、事前学習ができるわけではないので、まさに、一つの内容から学びが広がった例と言えよう。

写真６
　児童が質問している様子。

７．今回の事例からの学び

江戸東京たてもの園を活用した学習の取り組みから、学んだことを整理する。

①事前学習の重要性（課題の明確化）が再確認できた。

このことについては、布谷（２００５）によれば「人は自分が主体的に参加し、考える事で好奇心を満足させ、楽しいと感じる。自分の予測どおりに発見があるとそのことに満足感を感じ、楽しいと感じる。自らが目的を持って調べ、発見をするという過程が楽しいのであり、また自分が考えていたことについての新たな知識を加えることができ、しかもそれを自分で選択して学ぶことができるという状態にあることで人は満足し、楽しさを感じる。」と述べている。小学生でもこのことは学ぶ上で大切である。

②博物館学芸員と教員との「協働」により、学習プログラムがよりよいものになり、学習内容が充実することが再確認できた。

③教員同士が「協働」の姿勢をもって学習を進めることで②と同様の効果があった。

８．むすびに

今回、私の、教職大学院年報に掲載してもらうにはお恥ずかしいような拙い実践内容を報告しようと思ったきっかけは、「教職大学院での学びの還元」がほんの少しであるが実行できたことを知ってもらいたかったからである。

教職大学院派遣中によく学び、課題研究を行うことは当然のこととして、その後、その成果をどのように現場に還元するかということが大切であると､在学中に何度も話があり、その通りだと思った。大学院を修了し、当時の在籍校の校長とともに区の教育委員会へ修了の挨拶へ行ったとき、私はてっきり「派遣研修ご苦労様でした」と言われると思っていた。しかし、私がかけられた言葉は「これからですよ」だったのである。そして、現場へ戻って２～３か月たったころ、都の担当指導主事が学校へ来て「どんな成果を学校に還元していますか?」と言う聞き取り調査があった。そのときは、まだ、どんな内容をどんな方法で還元するかというところまで具体的なイメージがもてなかった。そして、ずっと耳に残っていたのは教育委員会で聞いたあの「これからですよ」の言葉であった。

今、修了から５年を経過し、自分の課題研究の内容を、ほんのわずかであるがやっと現場で実践し、ここに記録することができた。もちろん、教職大学院で学んだことは、課題研究に関することだけではなく、その他にもたくさんの内容があるが、その内容についても多少は還元していることは間違いないと思っている。

教職大学院で学んだことは「協働」ということである。私の課題研究「小学校教育における博物館を活用した指導の在り方～歴史学習・地域学習を例として～」は、学校現場内での「協働」と学校と博物館との「協働」なくしては成り立たない内容であり、これまでご協力いただいた方々に深く感謝している。

今回の報告は３年生が江戸東京たてもの園を活用した例であるが、それ以外に、課題研究の提案に基づいて行った博物館活用は下記の３博物館４例である。

・東村山ふるさと歴史館　３年生（２００９年・２０１１年）
・国立ハンセン病資料館　４年生（２０１２年）
・鉄道博物館　５年生（２０１０年）

※今回は、担任外として見学をコーディネイトした例の報告であるが、上記の４例は担任として引率している。

引用文献

布谷知夫『博物館の理念と運営　利用者主体の博物館学』　雄山閣　２００５年
伊東大介『小学校教育における博物館を活用した指導の在り方～歴史学習・地域学習を例として～』　教職大学院派遣研修研究報告書　２００９年